批評・紹介

中亞隨筆集

E. Ardov (E. I. Appreleva) : Sredne-Aziatskie Očerki. Shanghai, 1935. pp. 220.

此書は文學者の作品集であるから、こゝに列するのは不穩當かも知れない。然し中央亞細亞、それも既に歴史となつた帝政ロシア華やかなりし時代を題材とするスケツチで、露領トルキスタンの地理人情風俗言語を窺ひ得るとすれば、本誌に紹介して見てもそう場違ひでもなからうか。著者は十七年も、或はサマルカンドに、或はタシュケントに滯在してゐたのだから、只の通りすがりの旅行者ではない。収むる所の短篇十八、種々の風景、種々の民族、種々の生活を畫き出し、又挿入のカツト・寫眞も内容と相應じて興味を增す。異國のスケツチだから自然と出てくる土語、即ちウズベク語タヂク語百餘りの説明が卷尾に附してあるのは仲々にも親切である。この語彙中に出てゐないが、本文中で説明してあるものも少しはある樣だが、とにかく纒めてあるのは我等にとつては何より便利である。文學者の説明は語學者より却つて感じを示す事が往々あるから、參考になり得ると思ふ。此等の小品は嘗て「ルスキヤ・ヱドモスチ」紙に出たもので、今度遺著として輯錄したものと云ふ。著者アルドフの事は近刊の中央公論社「世界文藝大辭典」にも出てゐない樣だから、卷頭の小傳を略抄して置かう。

エ・アルドフとは雅名で、本名はエレナ・イヴノヴナ・アプレレヴで、露曆一八四六年二月二十四日にブララムベルグ將軍の女としてオレンブルグに生れ、ドレスデン・プラアグ等にて兒童教育を研究し、一八七二年にはシェネヴ大學に入學した。然し病氣で休學して、一八七六年に再び外遊したが、巴里で處女作「酒無きも罪あり」「アポロン・マルコ并チ」等の小説を書き上げた。彼女は若くして既に當時の有名な人々と相識となり、殊に親交のあつたイ・エス・ツルゲエネフは彼女の才能を認めて文學に從事する樣に勸め、アルドフの雅名をも擇んで呉れたのであつた。やがてピヨオトル・ヴシリエ并チ・アプレレフと結婚して夫と共にトルキスタンへ行つたが、絶

えず「ルスキヤ・ゼドモスチ」、「ゼストニク・エフロプイ」、「ニイワ」、「ルスカヤ・ムイスリ」などの有名な雜誌へ寄稿し、又單行作品をも出した。一八九八年には露都の文藝劇場で「碎かれた壺」を出して成功した。然し一九〇六年にイメレチヤ革命黨の爲めにチェルノモルスカヤ縣の自領ペトロフスコエ莊園で夫のピヨオトル・ヴシリエ并チが殺されるのを眼前に見たので、驚きの餘り呆然として創作なんか出來なくなつた。一九二〇年、デニキン將軍の白色戰線敗亡の後はノヴォロッシイスクを通つてセルビアに流亡し、ベエラヤ・ツェルコフィに次いでベルグラアドに移つて行つた。流亡の後は故國へ再び歸る望も絶えたが、彼女は自著を他國で出版しようと老眼を押し拭ひつゝ整理を倦まず續けて居たが、一九二三年舊曆十一月二十一日に帝政ロシアの夢を偲びつゝ七十八歳で歿した。此書には遺書の一として一九二三年の自序があるが、ヤツト昨年上海で子供等により出版されたのである。飄零流浪の才女轉變一代の運命は仲々にも痛ましい。

（石濱純太郎）

曹語研究資料

N. A. Nevskij: Materialy po govoram jazyka Cou. Trudy Instituta Vostokovedenija. XI. Moskva-Leningrad, 1935. pp. 136.

右はネフスキ先生の臺灣曹族語考である。昭和二年の夏季休暇にネフスキ先生は大阪外國語學校の同僚淺井惠倫教授と相携へて蕃語研究の爲めに臺灣に向ひ、余は之を神戸埠頭に送つたが、歸來直ちに兩先生は引續いて靜安學社の例會に於て調査豫報を報告された。その大要は靜安學社通報第一期、靜安學社報告第一などに載つてゐる。その詳細なる研究は淺井教授のシェデック語はSome Observations on the Sedik Language of Formosa として東洋學叢編第一冊に發表されたが、今又ネフスキ先生のツォウ語が茲にアカデミイによつて出版されたのである。共に臺灣蕃語研究の模範的作品と稱して決して溢美ではない。内容は次の通り。

序言。阿里山蕃曹族の概要と先生渡臺して曹族トフヤ社語研究の情況が記されてゐる。